

社会教育施設における美術教育実践

内田 裕子 埼玉大学教育学部芸術講座美術分野
 大岩 幸太郎 大分大学教育学部

キーワード：社会教育施設、博物館、美術館、図書館、教育普及活動

1. はじめに

今日の日本における、美術館を初めとする社会教育施設での教育普及活動の盛況ぶりには目を見張る。30年程前は、博物館学の授業で、学芸員でもある講師が、博物館の役割として教育普及活動があることを伝え忘れたと言って、翌週の授業で断る一幕もあったが、当時を想うと隔世の感がある。現在は、美術館には概ね教育普及担当職員が配置され、私設ギャラリーの学芸員においても、美術教育の専門家が採用される時代である。教育普及の対象も、生涯学習の普及に伴い、子どものみならず成人にまで広がりを見せ、今日の社会教育施設における教育普及活動は、恰も「ゆりかごから墓場まで」の標語の様な充実を見せている。

しかしながら、教育普及活動に携わると課題も見られ、ここでは財政面の課題が大きいものの、活動の内容・方法に関する改善の余地もある様に思われる。実際、活動の内容・方法に関する改善の示唆となる海外の実践に関する報告や研究は多数あるところであるが、その海外においても、教育普及活動の発展は日進月歩であり、先達で訪問したフィンランド、スウェーデン、ノルウェーの社会教育施設である〔美術館、博物館、図書館〕における美術に関する教育普及活動を紹介することには意味があると考えた。そこで本論では、それらの紹介を中心に、内容を検討することにした。

2. 社会教育施設における教育普及活動

海外の教育普及活動を紹介する前に、まず、社会教育施設における教育普及活動に関する国内の研究の状況を記す。社会教育施設における教育普及活動の報告は、文部科学省が1960年に開始し3年毎に実施する「社会教育調査」〔最新2018年〕¹⁾や、1987年4月より丹青研究所から発行されている『ミュージアム・データ』、論文等で行われている。また、日本博物館協会が1928年に創刊した『博物館研究』では、国内外の博物館の動向や新設博物館情報、博物館活動情報等が紹介され、各施設が発行する年報等にも学芸員や美術教育関係者による報告が多数ある。こうした社会教育施設における美術の教育普及活動に関する国内の資料の中から、研究の種類や内容の幅を理解するのに有効であると考えられる資料の一部を、表1に、発行年の昇順に挙げる。

表1 社会教育施設における美術の教育普及活動に関する国内の資料

No.	筆者「論文名」	概要〔掲載誌, 頁〕	発行年
1	鈴木真理・常盤繁「博物館（総合・美術）活動の実態」	1979年に実施した、博物館の活動内容に関する全国規模の調査結果の報告。〔『東京大学教育学部紀要』20, pp.173-212.〕	1981
2	佐藤厚子「今日のアメリカの美術館教育：理論確立への動き」	当時未だ日本の公立美術館においては未成熟であった美術館教育に関するアメリカの理論及び実践の紹介。〔『美術教育学』13, pp.33-41.〕	1991

3	家村珠代「ニューヨーク近代美術館における教育活動の理念、実践方法及びその歴史」	論文発表当時、日本において注目され始めた教育普及活動について、先行するアメリカのニューヨーク近代美術館における実践及び歴史の紹介。『美術教育学』13, pp.23-23.]	1991
4	滋岡陽子「滋賀県立近代美術館の教育普及活動：ボランティアスタッフの視点から」	教育普及活動において重要な役割を担うボランティアスタッフの意義と成果についての報告。『美術教育』277, pp.40-41.]	1998
5	小林真里「フィンランドにおける文化政策の展開：諸外国における文化振興法・フィンランドの事例」	芸術振興法を比較的早い時期に制定したフィンランドについて、関連法規も併せて検討することにより、文化・芸術政策において保障しようとしたことを検討する。『文化経済学』2(3), pp.45-56.]	2001
6	「美術館・博物館、文書館の情報専門職制の開発と養成：現状と課題」	公開シンポジウム「変わりゆく図書館情報学専門職の資格認定：専門団体はどう取り組んでいるか」及び図書館の類縁機関にある美術館・博物館及び文書館における情報専門職の開発の進捗状況をテーマにした研究会の報告。『アート・ドキュメンテーション研究』11, pp.106-139]	2004
7	若園雄志郎「博物館における多文化教育活動に関する考察：北海道開拓記念館の事例を通して」	各国の博物館におけるマイノリティに関する資料の収集・保存・調査研究・教育普及活動に関する例として、北海道開拓記念館を取り上げ、更に、ニューヨーク近代美術館やロンドン博物館での展示の例も示す。『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』11(2), pp.201-211.]	2004
8	佐々木宰「スウェーデン・フィンランドにおける美術・デザイン教育」	スウェーデンの芸術デザイン大学コンストファック、フィンランドのヘルシンキ芸術デザイン大学・アラビア総合学校・アートカンパニーの教育実践内容の紹介。『北海道教育大学紀要 教育科学編』57(1), pp.107-121.]	2006
9	佐々木宰「スウェーデン・フィンランドにおける美術・デザイン教育(2)」	スウェーデンの王立美術学校・文化会館・現代美術館、フィンランドの総合展覧会施設であるWeeGee及び、その中に含まれるEMMAの教育実践内容の紹介。『北海道教育大学紀要 教育科学編』58(1), pp.81-96.]	2007
10	松田陽子「関東支部企画『画材と素材の引き出し 作品鑑賞+特別講演』」	イギリスのヴィクトリア&アルバート博物館の展示装置の妙に啓発され、心ときめかせながら見ることを楽しむ展示のあり方を追求してきたという目黒区美術館の学芸員の降旗千賀子氏による教育普及活動に関する講演及び鑑賞ツアーに関する報告。『日本色彩学会誌』32(4), pp.309-310.]	2008
11	奥本素子・加藤浩「美術館学習初心者のための博物館認知オリエンテーションモデルの提案」	美術館の展示から意味を構築する能力（博物館リテラシー）の不足を補うための博物館学習支援モデルの提案。『日本教育工学会論文誌』33(1), pp.11-21.]	2009
12	佐々木宰「イギリスの美術館における教育普及活動(1)：ロンドンの美術館及び博物館、アートギャラリーの事例」	ロンドンのV & A Museum of Childhood及びSir John Soane's Museum、The National Gallery、V & A Museum、Whitechapel Galleryにおける教育普及活動の調査結果の報告。『北海道教育大学紀要 教育科学編』60(2), pp.157-171.]	2010
13	佐々木宰「イギリスの美術館における教育普及活動(2)：リバプール、オックスフォード、ケンブリッジの美術館及び博物館、アートギャラリーの事例」	イギリスの地方美術館であるTate Liverpool及びModern Art Oxford、The Fitzwilliam Museumの教育普及活動についての調査結果の報告。『北海道教育大学紀要 教育科学編』61(1), pp.291-302.]	2010
14	森本昭宏「国際彫刻シンポジウムに見られる対話型鑑賞教育：ドイツの園児・小学生の活動を中心として」	ドイツのチューリンゲン州における3つのシンポジウムと美術館ガイドツアーの調査報告。『埼玉学園大学紀要 人間学部篇』12, pp.169-179.]	2012
15	烏賀陽梨沙「アメリカの美術館教育の発展に関する要因についての一考察：1990年代以降を中心に」	アメリカの美術館教育の発展についての、財源や認知心理学からの分析。『美術教育学』35, pp.123-135.]	2014
16	奥村高明・中山迅・大石和江「テート美術館『アートへの扉』理論の検討」	イギリスのテート美術館の教育普及部長と学校担当チームが開発した美術鑑賞モデル理論である「アートへの扉」の内容についての検討。『日本科学教育学会年会論文集』38, pp.13-14.]	2014
17	池内麻衣子・福田隆真「フィンランドの美術教育とデザインについて」	フィンランドのアアルト大学視覚芸術学部美術教育学科に研究生として在籍した筆者〔池内氏〕によるフィンランドの美術教育及びデザインに関する報告。『山口大学教育学部研究論叢（第3部）』69, pp.283-299.]	2015
18	菖蒲澤侑「美術館の教育普及機能の変遷と展望」	美術館の運営背景にある社会教育概念及び美術館の教育普及機能の変遷についての紹介。『美術教育学研究』48, pp.233-240.]	2016
19	深澤悠里亜「アートカードを使用した鑑賞法の研究」	美術館の教育普及活動において多く使用されるアートカードの内容及び使用の実態についての調査及びアートカードを用いたアートゲームの開発。『美術教育学研究』49, pp.337-344.]	2017

表1に示した様な、美術の教育普及活動に関する資料を読むと、収蔵品を持つ社会教育施設が行う教育普及活動では、その施設の常設展や企画展の鑑賞に際して〔事前及び事後学習のために開発されたアートゲーム、作品解説を行うギャラリートーク・ギャラリーツアー、展示作品に関連する作品製作〕等が行われ、一方、収蔵品の無い施設においては、例えば、作品の原寸大の写真パネル等を準備して、来館者はそれを鑑賞した後に製作を行う等²⁾、資料や複製品を用いた展示とそれに関連する製作が主たる活動になっていることが分かる。また、資料に見られるテーマは〔文化・芸術政策、社会教育施設における情報専門職、教育普及活動に関わるスタッフ、教育普及活動の変遷や歴史、教育普及活動の手段となるアートカード〕等、様々であり、これらの資料を通じて、今日では、美術に関する教育普及活動の多様な蓄積があることが確認出来た。

3. 海外の社会教育施設における美術に関する教育普及活動

前回、2013年に行った海外の美術の教育普及活動に関する調査では、訪れた〔オーストリア、チェコ、ハンガリー、デンマーク〕の国立博物館〔美術館〕等の中で、教育普及の観点において取分け先進的な取り組みを行っていると感じたのはコペンハーゲン国立美術館であった。当時、日本でも普及しつつあったデジタル端末が多数用意された館内の一室には、ゆったりと座ることの出来る場所があり、来館者が思い思いにiPadを用いて作品を検索し解説を読んでいた。そのデータには、展示された作品の解説は元より、関連する作家や作品、時代背景等が含まれ、展示作品を見るための時間が無くなる程、楽しく集中して知識を得ることが出来た。また、展示室にも必ず数台のiPadが置かれ、動く作品に関しては、展示物では見られない動きも動画で見ることが出来た。更に、各展示室内に置かれた椅子のデザインは、個性的且つ取り取りであったが、建物自体が新旧調和している様に、椅子に限らず備品も総体として統一されたイメージに映った。他方、色味の少ない展示室とは異なり、1階の一面にあるレストランのテーブルは黄緑色に統一され、壁には鮮やかな色のパネルが色取り取りに配置されており、供される食事は皿をキャンバスに、野菜や花卉を絵具に見立てた「sunflower」と言うサラダ等、高度なセンスが感じられる空間であった³⁾。

コペンハーゲン国立美術館の現在のWebサイトを見ると、多様な教育普及活動が紹介されているが、特筆されるのは、子どもの誕生会の企画である。そこには、想像力を解き放ち創造性を探求することを目的に、ニーズに応じて誕生会がカスタマイズ出来ると書かれていた。それは、最初に美術館の収蔵品で700年に亘る美術の探求を行い、そこで多くのインスピレーションを集め、次に、ワークショップにおいて、線画や描画、彫塑や彫刻を行うという様な内容である。時間は2時間、費用はデンマーク語で行う場合がDKK1900、それ以外の言語の場合はDKK2000で、人数は最大が子ども28人、大人6人であり、食事は持参可能、誕生会后、来館者のための食堂で食事をしながら祝賀会を続けることが出来るとある⁴⁾。後述するフィンランドの「アテネウム美術館」でも同様の企画が行われている他、オランダ⁵⁾やイタリア⁶⁾の美術館における誕生会開催の記事も見られるが、現在の日本では、誕生日に美術館を訪れると入館料が無料であったり、ポストカード等のプレゼントを受け取ったりすることはあっても、管見の及ぶ限り、美術鑑賞やワークショップを行う誕生会が出来る美術館は無い。

前回から6年後の今回、2019年の北欧の調査では、前回よりも更に多くの端末機が各施設に設置されていると予想したが、実際には「借りる」端末機から「持参する」端末機へと切り替わっていた。例えば、作品のキャプションにQRコードが記され、それを読み取って作品解説を読む形

式の施設が複数あり、併せて、多くの施設において無料Wi-Fi環境が整備され、その性能は、画像の読み込みにも支障のない程度の速度が確認出来た⁷⁾。ただ、Facebookで解説を用意している施設もあり、公立の施設が私企業へのアクセスを促す点は考えさせられた⁸⁾。

次の表2には、今回の調査〔2019年8月14日～27日〕で巡った17施設を挙げる。

表2 調査施設一覧

No.	施設名	分類	所在地	
1	アテネウム美術館	美術館	フィンランド共和国	ヘルシンキ市
2	デザイン博物館	博物館	フィンランド共和国	ヘルシンキ市
3	フィンランド建築博物館	博物館	フィンランド共和国	ヘルシンキ市
4	国立現代美術館キアズマ	美術館	フィンランド共和国	ヘルシンキ市
5	フィンランド国立博物館	博物館	フィンランド共和国	ヘルシンキ市
6	ヘルシンキ市立中央図書館	図書館	フィンランド共和国	ヘルシンキ市
7	スウェーデン国立美術館	美術館	スウェーデン王国	ストックホルム市
8	北方民俗博物館	博物館	スウェーデン王国	ストックホルム市
9	スカンセン	野外博物館・動物園・水族館	スウェーデン王国	ストックホルム市
10	ストックホルム市立図書館	図書館	スウェーデン王国	ストックホルム市
11	コーデー [KODE] 1～4	美術館	ノルウェー王国	ベルゲン市
12	ハンザ博物館	博物館	ノルウェー王国	ベルゲン市
13	ベルゲン公立図書館	図書館	ノルウェー王国	ベルゲン市
14	ヴィーゲラン公園	野外彫刻庭園	ノルウェー王国	オスロ市
15	ムンク美術館	美術館	ノルウェー王国	オスロ市
16	ノーベル平和センター	博物館	ノルウェー王国	オスロ市
17	ノルウェー民俗博物館	野外博物館	ノルウェー王国	オスロ市

今回訪れた表2の施設に共通して言えるのは、実践されている教育普及活動が、あらゆる人々に対して開かれており、身体の状態や興味に応じた鑑賞や製作が出来る様になっていることである。しかし、コペンハーゲン国立美術館で見た、子どもが製作するための部屋が通常の展示会場の中にある施設は見る事が出来なかった。それでも、横浜美術館が行っている「子どものアトリエ」や「市民のアトリエ」⁹⁾、或いは両者を合わせた様な活動は複数の施設で見られた。

更に、今回訪れた施設の中で最も感銘を受けたのは、後述するフィンランドの「ヘルシンキ市立中央図書館 (Oodi)」¹⁰⁾〔表2：No.6〕である。この図書館は、我々が訪れた後の2019年8月27日に、ギリシャのアテネで開催された「第85回世界図書館情報会議」において「国際図書館連盟 (IFLA)」が2019年度の「Public Library of the Year (公共図書館オブ・ザ・イヤー)」に選んだことで知られるが、ヘルシンキを訪れていた3日間、連日、Oodiの図書室のあるガラス張りの3階には、子どもたちが走り回っている姿が屋外から見えた。3階建のこの施設は、従来の図書館の枠を越え、2階の広大なフロアには、楽器の演奏や写真の撮影・現像・編集が可能なスタジオが複数あり、3Dスキャナー¹¹⁾やレーザーカッター、ヒートプレス機、ミシン、刺繍機等が使用出来る作業スペースがガラス張りの室内に用意されていて、美術教育とも関係の深い場所であった¹²⁾。

次からは、表2に挙げた施設の中の、表中のNo.欄を水色で着色した6施設について、教育普及活動を中心に報告する。その際、表中のNo.欄を藤色で着色した4施設についても触れる。

3-1 No.1：アテネウム美術館

表2のNo.1に挙げたアテネウム美術館では、展示会場に入って間もなく、図1に示す壁面が現

れる。この壁面の上部には大きく「on an expedition」〔発見の旅〕と書かれ、中央には、フィンランドの作家 Juhani Harri〔1939-2003〕の《tuuli työntyy》〔風が凧ぐ〕と言う題名の、卵の殻を材料に作られた帆船の立体作品があり、作品の左側には作品に関する情報〔タイトル、材料、解説〕、右側には天眼鏡の図像と「can you find more?」〔もっと見付けられる?〕という文字が書かれ、加えて〔作品に近付いて見ると更なる発見があつてそれが新しいアイデアに繋がること、ポケットの中の面白い物で創造的な作品が出来ること〕が、来館者へのメッセージとして記されていた。



図1 アテネウム美術館の壁面

更に、アテネウム美術館には、子ども向けの鑑賞用ガイドブックが複数の言語で用意されていた。言語に応じて表紙の色が異なるガイドブックは、館内や入口付近のパンフレット置場に準備され、誰でも受け取ることが出来る。なお、アテネウム美術館では、ミュージアムツアーが曜日を変えて、公用語のフィンランド語とスウェーデン語の他、英語、ロシア語で行われている¹³⁾。

ミュージアムツアーにも用いられるこのガイドブックは、A4判を2つ折りにしたA5サイズの大ききで、厚手のケント紙程の厚みがあった。図2には、このガイドブック〔全4頁〕を、1頁及び4頁〔左図〕と、2頁及び3頁〔右図〕の2つの画像で示す。表紙〔左図・右側〕には大きく猫の Skissi が描かれ、この猫がガイド役として、表紙を捲った2頁〔右図〕に掲載された7作品について、解説や質問をしながら鑑賞者を作品の展示場所へと誘う。

ガイドブックに挙げられた7作品はいずれも古典的な作品であり、このガイドブックを用いた



図2 フィンランド語版の子ども向け鑑賞用ガイドブック

5歳～8歳の子どもたち向けのミュージアムツアーでは、古典作品の見方を学ぶことを主眼としていることがWebサイトの解説に書かれていた。

次の表3には、ガイドブックに掲載された7作品の記述を、質問のみ概要に変更して挙げる。

表3 ガイドブックに掲載された内容

No.	作家	作品名	制作年	質問概要
1	Hugo Simberg	Self-Portrait 〔自画像〕	1907	多くの肖像画が展示されている展示室内の作品から、白い上着と白い帽子、更に立派な髭をヒントにこの作品を探す。
2	Alvar Cawén	Lullaby 〔子守唄〕	1921	題名の「子守唄」を挙げ、絵が示す情景は昔々から続くものと説明して、絵の中で子守唄を歌っているのは誰かと尋ね、あなたに子守唄を歌ってくれたのは誰かと問う。
3	Magnus Enckell	Lempi (from Kuorsalo) 〔Kuorsalo [島] のレンピ〕	1914	猫と同様に人も表情から感情を知ることが出来、気持ちを知らするために表情を真似ることも出来るとして、この美術館の作品にはどのような表情が見られるか、また喜びや悲しみを表す色は何色かと尋ねる。
4	Hugo Simberg	The Wounded Angel 〔傷を負った天使〕	1903	No.1と同じ作家の作品を挙げ、その作家を覚えているかと尋ね、更に、作品に描かれている情景から、作品の中で起こっていることを想像させる。
5	Ville Vallgren	Echo 〔エコー〕	1887	作家が動物を好んだことを紹介し、次に、作品のタイトルが「エコー」であること、材料は大理石であることを述べ、更に、耳に手を当てているこの作品と同じポーズをとってみると何が聞こえるかと尋ねる。
6	Akseli Gallen-Kallela	Kullervo Cursing 〔クレルヴォの呪い〕	1899	フィンランドの民族叙事詩『カレワラ』に登場するクレルヴォを描いた作品の場面を、〔悪戯されて持たされた〕石の入ったパンによって〔父の形見の〕ナイフが折れたことで怒っている場面と説明し、作品中のパンの場所を探すよう促し、描かれたクレルヴォと同じポーズをとってみてはと誘い、更に、犬は人間と仲が良いとされるが、猫も同様であると思うと述べ、作品中の動物を挙げる様に指示をする。
7	Albert Edelfelt	The Luxembourg Gardens, Paris 〔パリ、リュクサンブール公園〕	1887	この作品〔小さな習作と隣り合わせて展示されている大画面の作品であり、画面には人々が集う公園が描かれている〕について、晴れた日の公園で遊ぶ自分を想像し、公園では何をしたいか、公園で聞こえる音を挙げる様にと誘う。

ガイドブックに掲載された7作品には全て人物が表現されており、質問は、作品に表現された物を見付けたり、作品に表現されている姿態を真似ることで表現されている場面における人物の感情を想像したり、情景と同じ環境におかれたとすると自身は何を感じ考えるかを想像したりすることを促す内容である。また裏表紙では、ガイドを務めた猫のSkissiが素性を明かし、Skissiの単語がフィンランド語で「スケッチ」を意味することから、四角の枠内に何かをスケッチしようと子どもたちを促している。

アテネウム美術館は、このガイドブックを使用した学校のためのミュージアムツアー用の教師用ガイドも作成しているが、これは美術館のWebサイトからダウンロード出来る様になっている¹⁴⁾。教師用ガイドには、ツアーが45分を要し、子どもたちの年齢層は5歳～8歳であることや、ツアーの始まりに教師が説明する内容には〔作品には触れてはならないこと、ツアー前後は中庭の長机が空いていたなら軽食を採っても良いこと、ツアー中の写真撮影は可能であること〕等のルールに関することや、ツアー中の鑑賞の際は〔作品が様々な感情を表していること、一度に全ての作品を見る必要はないこと、冗談を言ったり休んだりしても良いこと〕に加えて、美術館自体に関心を持ったりガイドブックの指示内容の意図をグループで議論したりすることが出来ると伝えたり、更に、ツアー後は、児童に、ツアー中に見た作品の中で、感銘を受けた作品や記憶に残った作品を尋ねたり、猫のSkissiの冒険の物語を考えることを示唆したりすること等が記されている。

因みに、先に挙げたスウェーデン国立美術館〔表2：No.7〕では、WebサイトにPowerPointで作成した教師用のスライド教材が複数用意されており、適宜ダウンロードして使用することが

出来る様になっている。今回、Webサイトを閲覧した際には、肖像画とその性格をテーマにした6枚の作品から成るスライド¹⁵⁾と、身体の美しさや服装と性別をテーマにした20枚の作品から成るスライド¹⁶⁾の2種類の教材がダウンロード出来た。

その他、アテネウム美術館のWebサイトではワークショップも紹介されており、そこには全年齢を対象にしたワークショップと大人を対象にしたワークショップがあること、いずれも特別なスキルを必要としないことが書かれている。また、ワークショップの料金については、子どもの場合は無料、大人の場合はワークショップ代金と入館料の他にコーヒーと紅茶代を含んだ参加費を徴収するとしている¹⁷⁾。なお、大人を対象にしたワークショップの1つは、博物館の展示室内でヨガを行うものであった。日本では、直島にあるベネッセハウスの「ミュージアム」と名の付く宿泊施設¹⁸⁾が、滞在中いつでも何度でも美術館に入館出来る様になっていて、人間の生活と美術とが密接に関わる体験が出来る点に両者の類似性を感じたが、寡聞にして、その他の国内の施設での類似の例は知らない¹⁹⁾。

フィンランドで見たミュージアムショップの複数箇所販売されていたのが、€4のPocket Guide to Mixing Colorと6€のPocket Color Wheelである²⁰⁾。類似品は、日本においても学校で使う絵具セットに入っていて、中学校の美術科の授業では実際に生徒が使用しているのを見たことがある。これは、バウハウスで教鞭を執ったイッテン〔Johannes Itten, 1888-1967〕が考案したDer Farbstern〔1921年〕にも似た、混色に関する理論を模型にした資料であるが、製造元はアメリカである。アテネウム美術館のWebサイトには、作品鑑賞について述べられている箇所に、形のみならず色についての着目を促す文章が見られ、フィンランドでは、鑑賞において形や色に関する基礎的な知識を習得することに重きを置いていることが感じ取れた。但し、今回の視察の間、スウェーデン及びノルウェーのミュージアムショップではこれらの商品を見ることは無かった。

アテネウム美術館はArt Testerプロジェクトに参加している。Art Testerプロジェクトとは、フィンランドの100周年記念事業の一環として2017年9月に始まり2020年5月まで実施される生徒の芸術体験プロジェクトで、参加のための応募資格はフィンランド全土の総合学校の8年生〔中学校2年生相当〕14～15歳全てにあり、学校単位で申し込む。参加が決まると、地方の生徒はまず自身の州の、次に首都ヘルシンキの〔首都に住む生徒は、その反対の順序で〕劇場、美術館、オペラ、コンサート、美術展等を無料で訪問する²¹⁾。訪問先となる50の芸術機関は毎年公募で選ばれ、選考の基準は芸術の質とされる。また、Art Testerプロジェクトの目的は、生徒の思い出に残る芸術体験を提供することであり、且つ、感情を処理して表現するツールを生徒に与えることと言う。なお生徒においては、単に施設を訪れるだけでなく、訪問の前にはワークショップ、ビデオ、舞台裏訪問等、様々な形式による学習を行い、事後は、訪問した際に提起された問題に対処することが計画されている。

Art Testerプロジェクトでアテネウム美術館を訪問した場合の滞在時間は1.5～2時間、その間、生徒はTaidebattle〔アートバトル〕に参加して作品との双方向的で建設的な対話を行う。訪問後、生徒は、施設の評価のために自身の考え・洞察・意見等を他の生徒と共有する「評価アプリ」に投稿するが、そこでは、芸術が呼び起こした感情や芸術に対する印象、訪れる前後の気持ちの変化、再訪の可能性、感想等が尋ねられる²²⁾。それを見ると、生徒が書いた感想には〔退屈せずあつという間に時間が過ぎた、素晴らしい、快適、新しいことを学んだ〕等があった。実は、本プロジェクトの目的の1つには、このアプリが可能にする生徒の芸術体験のフィードバックの収集があり、収集されたデータは視覚化されリアルタイムでWebサイト上に公表される。そこから本プロジェ

クトが「史上最大の組織化された芸術評論家になる可能性がある」²³⁾と見做され「Art Tester」と命名されていることが想像された。更にまた、芸術機関においては、本プロジェクトが未来の顧客と繋がる機会になると捉えられている。

このプロジェクトの全参加人数は20万人、総費用は€2000万以上に及ぶとされるが、フィンランドとスウェーデンの文化財団の資金提供により実施され、公的資金は含まないとしている。

3-2 No.2：デザイン博物館

スウェーデンからノルウェーに移動する際、フィンエアーの機内誌『BLUE WINGS』〔2019年8月号〕に「デザイン博物館」で開催中の「Secret Universe」展〔2019年4月5日～9月29日²⁴⁾〕の案内を見付けた。その宣伝の効果か、デザイン博物館には国内外の人々が多数来館していた。企画展示室内では、デザイナーデュオのAamu Song〔1974生〕とJohan Olin〔1974生〕が、世界を旅して集めた伝統工芸技術を、動画・静止画・作品で紹介すると共に、彼らが各地の工芸家たちと一緒に制作した作品や、来館者が製作した作品を展示していた²⁵⁾。展覧会の趣旨は、工芸技術が絶えることや持続不可能な現代の消費社会への警鐘を鳴らし、消費主義に代わるものとは何かを問うこととされ²⁶⁾、日本の伝統工芸技術や品も複数紹介されていた²⁷⁾。全体的にこけしの類の木工品が多かったが、それらの作品は山本鼎が関わった農民美術運動を思い起こさせた。

かつては高等学校だったデザイン博物館の1階の展示場では、フィンランド独立100周年に当たる2017年にリニューアルオープンした展覧会「Utopia Now – The Story of Finnish Design」〔2017年2月4日～2020年12月31日²⁸⁾〕が開催され、そこでは、マリメッコ・イッタラ・アラビア・ノキア等、フィンランドが誇るデザインや工業分野の歴史が紹介されていた。また2階では、上記のSecret Universe展が行われていたが、その展示室内の装飾は、高価な入場料で知られる森美術館の展示に見られる様な凝った作りであった。更に、デザイン博物館のWebサイトを見ると、この博物館では、デザインを用いて新たなビジネスモデルを創造するための支援制度〔Design Club〕を設けていることが分かる²⁹⁾。デザイン博物館ではDesign Clubをアアルト大学³⁰⁾の美術・デザイン・建築学部と連携して運営していると言う。

Webサイトからは、博物館が収蔵する作品の画像を購入出来る様になっており、1枚€100から販売されている。但し、画像の購入は他の美術館でも可能で、前述のコペンハーゲン国立美術館のWebサイトには、様々な画像の取り扱いの説明も挙げられており、例えば、著作権が失効したパブリックドメインの作品については、それらの作品の画像がダウンロード出来るWebサイトを紹介する箇所で、作品画像で行えることが具体的に記されている。即ち、教員であれば、コラージュやアニメーション等を作成する際の材料等として、研究者や学生は、授業用に独自の画像ファイルを作成したり印刷物やオンライン出版物のイラストとして、デザイナーが用いたり創作に用いたりする場合は、携帯端末やタブレット端末、ラップトップ等のデバイスでパーソナライズし、画像グラフィックデザインソフトウェアのPhotoshopを用いて再生したり、リミックス、コラージュ、アニメーション、ビデオ等を作成したり、更に、Tシャツや葉書、コーヒーカップに印刷したりする他、ソーシャルメディアで共有出来ることが記されている³¹⁾。

Secret Universe展の作品は、民芸品の様なものが多かったせいか、来館者には親子連れが多く見られた。また、訪れた日、デザイン博物館の地下では、午後5時からの遅い時間帯の設定で行われるマトリョーシカに着色するワークショップの準備が進められていて、ワークショップ会場の入口の看板には、参加は大人でも子どもでも良く、年齢は問わないと書かれていた。なお、デ

デザイン博物館での教育普及活動〔learn and experience〕の対象は、大人・子ども・親子・家族・教師等とされ、Webサイトでは教師に対する教材の提供も行っていった。更に、ここでも子どもの誕生会が開催出来、平日か週末の2時間、料金は平日なら€100、週末は€120で、最大15人〔子ども5人につき大人1人を要す〕、食事は、博物館内のカフェで採っても各自で持ち込んでも構わないとしている。また、デザイン博物館が提供する教育普及活動のメニューには、大人のグループ向けワークショップ、子どもとその家族向けのワークショップ、ガイド付きミュージアムツアー、教育機関向けのワークショップ、ガイド付きミュージアムツアーがあり、その他にも、自由に活動が出来るスタジオ³²⁾やワークショップ³³⁾がある。

3-3 No.4：国立現代美術館キアズマ

キアズマ〔Kiasma〕とはギリシア語の「交差」を意味し、英語ではchiasmaに相当する言葉とされる。染色体交差箇所、神経交差の意味もあるキアズマと言う言葉が誘発するイメージは、確かに館内の姿形に重なった³⁴⁾。キアズマのWebサイトには日本語の表示もあることが示す通り、個人旅行の日本人の観覧者が複数見られた。キアズマは1998年開設ではあるが、現代でも斬新な建築物と言える館内には、例えば特異な形態の図書室があり、そのガラス張りの個室は天井が吹き抜けて、中2階の様な上階の閲覧室から室内が見下せるスキップフロア構造をしていた³⁵⁾。

キアズマを訪れた時に開催していたのは、人と動物と自然をテーマにした収蔵品に基づく「共存」展³⁶⁾であったが、そこには、植物をモチーフにして作られた音楽を、バーカウンターの様な机に複数台置かれたiPadのヘッドホンから立ったまま聴く《immigrant garden》³⁷⁾と言う作品や、アンドロイドを撮影した写真の中に1枚だけ人間の写真を含んだ4枚の写真を並べて³⁸⁾、人間の写真はどれかとキャプションで問う作品³⁹⁾等があった。なお、この写真作品の作者であるMaija Tammi〔1985年生〕は、4枚の内、人間を撮影した写真がどれであるかは明らかにしていない。

5階の広いギャラリーでは、アイスランドのHrafnhildur Arnardóttir〔1969年生〕による展示が行われていた⁴⁰⁾。天井には色取り取りの人工毛が房となり縦横無尽に吊るされ、来館者は、床に敷かれた布団程もある大きなクッションに寝転び、作品を見上げて鑑賞出来た。この作品は、髪の毛のもつれの構造が神経細胞に似ていることから、作品が直接人間のシナプスに影響を与えることを期待して作られた作品であると言う。訪れた際には、乳児と母親の集団も来ていて、乳児がクッションの上で転がったり手足をばたつかせたりする姿から、乳児にとっても心地良い空間であることが理解出来た。なお、キアズマでは、3ヶ月から11ヶ月の乳児と保護者を対象にした1.5時間のワークショップが行われており、2019年8月13日～9月13日は「色で遊ぶ」〔Babies Play With Colours〕が開催中であった⁴¹⁾。次頁の図3には、キアズマのパンフレットに挙げられている子どものための教育普及活動に関する頁を示す。

その他、1～4歳児向けの親子ワークショップは入館料以外不要で、色について理解することを目的にしており、他方、土曜日の午後1時～午後4時に開催されるワークショップは、3歳以上であれば誰でも無料で参加が出来、現代美術を学ぶことを目的に、アクリル絵具やインク、木炭、水彩等、毎週異なる材料と用具を用いて異なるテーマで活動するとしている。更に、治療やリハビリテーションのためのグループワークショップも無料で開催され、こちらは2時間制で10～12人を1グループとし、電話かメールで予約を受け付けている。

更に、展示会場内には、展示作品とワークショップのコラボレーションが試みられた部屋もあり、例えば、来館者がヘッドホンを付けてリングの様な場所に上がり、ヘッドホンから流れる英語の

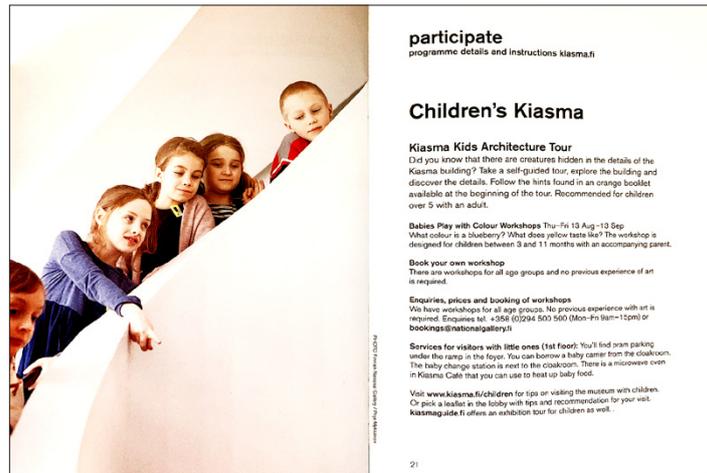


図3 “A guide to Kiasma just for you”のChildren’s Kiasmaの頁

指示に従って身体を動かしたり声を出したりする部屋や、室内の中央に置かれた人体の3倍程度の大きさのマネキンを、来館者がその周囲に配置されたイーゼルの場所でデッサンをし、完成した作品を壁に展示するアトリエの様な部屋もあった〔図4〕。壁に貼られた作品を見ると、絵の上手下手に拘りなく、来館者がモチーフに触発され思い思いに描いたことが分かる。



図4 ワークショップ会場内の風景

共存展では、ソファのある一室で、展示作品を作った作家たちのインタビュー番組が上映されていたが、この番組は美術館のWebサイトでも配信されている他、YouTubeのWebサイトで公開もされている⁴²⁾。また、キアズマのWebサイトには「ガイド」を目的にした箇所があり、その1つには「子ども向け展示場」とされた、親子で一緒に作品を探索する際のアイデアを紹介する箇所があり、親子が館内で見たものについて話す際、ここに記されたアイデアを参考にすることが出来るとしている。

更に、キアズマには、葉書大程度で17頁の、5歳以上の子どもが美術館内を巡る際にガイドの役目を果たす冊子⁴³⁾が用意されていた。その冊子では、館内の特徴のある形〔照明、手摺、ドアノブ、建物、階段 等〕に注目したり、そうした形を生き物に見立てたりする様に促したり、建築家の説明をしたりして、子どもたちが、建物の細部に気付き、自分で発見する楽しさを体験することが企図されていた。

3-4 No.6 : ヘルシンキ市立中央図書館 (Oodi)

前述の通り、今年2019年度のPublic Library of the Yearに選ばれたヘルシンキ市立中央図書館⁴⁴⁾は、訪れたのが土曜日ということもあり、どこも満員の状態であった。訪れた際は受賞前であったが、素人目にも斬新さは明らかであった。その他、本年度のPublic Library of the Yearの候補に挙がっていたのは、オーストラリアのGreen Square Library and Plaza、オランダのBibliotheek LocHal、ニュージーランドのクライストチャーチ中央図書館 (Turanga) であったが、過去には図書館ではなかった場所に新たに建設されたり設置されたりした世界で最も優れた新しい公共図書館に授与されるというこの賞の趣旨からOodiが選ばれたとされる⁴⁵⁾。但し、この賞の評価基準に図書館の教育支援の方法及び内容が含まれていることから、今日の新しい図書館においては、教育支援活動が重視されていることは明らかであり、他の候補となった図書館においても同様の配慮は行われている様であった。なお、近年の受賞館の所在国を見ると、オランダ〔2018年〕、デンマーク〔2016年〕、スウェーデン〔2015年〕であり、北欧勢の受賞が目立つ。

今回訪れた他の図書館である、ストックホルム市立図書館〔表2 : No.10〕は、円形の書架が荘厳な雰囲気を与えることで知られ、また、ベルゲン公立図書館〔表2 : No.13〕は、移民のために始まった「Språk」と言うボランティアによる無料の言語喫茶〔語学カフェ〕を行うことが日本でも報道されているが⁴⁶⁾、原則として本を読むことを主とするこれらの図書館とOodiは根本が異なる印象があった。なお、言語喫茶はストックホルム市立図書館でも行われていて、図書館のWebサイトでは、ボランティアのマネージャーの楽しい指導法によって参加者がスウェーデン語の会話能力を練習する機会を与えることを謳っている様に⁴⁷⁾、複数の言語が使用される国においては、言語喫茶は必要且つ重要な取組であると思われた⁴⁸⁾。

OodiのWebサイトでは、幼稚園と学校のためのワークショップの予約が出来、学級単位で訪れることも出来れば個別に訪れることも出来て、個別の場合は、事前にワークシートをWebサイトからダウンロードして印刷をし、図書館を訪れた際のマナーやミッションを確認することが出来る様になっている。ミッションには〔ロッキングチェアの数を数えること、設計者をWeb上で探すこと、3Dプリンターのある場所を探索したり台数を数えたりすること、3階の大きな窓から見える有名な3つの建物に名前を付けること、子ども向けの外国語で書かれた本の棚を調べてフランス語・ロシア語・アラビア語・ヒンディー語・ソマリ語の本を見つけたらチェックをすること、自身の使う言語の本のある場所を記入すること、ボードゲームが借りられる場所を見つけて2つのゲームについて説明をすること〕等が挙げられている。また、このWebサイトを開くと、画面の右下に携帯端末の形状とチャット形式の画面が現れて、カスタマーサービスからの連絡とする「お手伝いしましょうか?」の言葉が出ていた。図書館の間取り図もWebサイトからダウンロード出来る様になっている⁴⁹⁾。

上記の個別訪問者のためのワークシートには他に高校生用があり、これには、図書館内に敷かれた7枚〔6枚は3階、1枚は1階〕のカーペットについての質問が記されている⁵⁰⁾。例えば、3階に敷かれた1枚で、子どもが遊んでいる場所の床に敷かれていたカーペットには「MOOMIN」〔ムーミン〕の作者として有名なトーベ・ヤンソン〔Tove Marika Jansson, 1914-2001〕の作品をテーマにLaura Merz〔1982年生〕が制作したキャラクターがデフォルメされたカーペットがあるが、このキャラクターの中からトーベの創ったキャラクターを探したり、トーベが書いた本を検索したりすることが記されている。別の、フィンランドの文筆家Pentti Saarikoski〔1937-1983〕の顔を描いたカーペットについては、なぜ強い色で描かれているのか、色は何を象徴しているのか、

といった造形的な質問に続いて、Pentti とはいつの時代の誰なのか、Pentti が書いた本を図書館内で見付けられるだろうか、という質問が挙げられていた。更に、カーペットについて質問をする理由も記されており、それによれば、カーペットは空間を活気付け想像力を呼び起こすストーリーテラーの様な役割を担うと考えられていると言う。また、それらのカーペットは、北インドの数百年に及ぶ伝統ある手工芸によって手作業で作られているとも書かれていた。なお、図書館の説明によると、6枚のカーペットが敷かれている3階の本を読む空間は「Book Heaven」〔本の楽園〕と呼ばれ、unwinding と relaxation の両方の寛ぎ、即ち、問題について考えたり悩んだりすることを止めて緊張を解し、本を読む等のレクリエーションを楽しみ心身を癒す「寛ぎ」を目的に設計されていると言う⁵¹⁾。100,000冊の本が、樹木とオアシスの特徴とする壮大で光に包まれた環境の中にあるとされる Book Heaven では、人の多さすら気にならない余裕が、建物の材料やデザインから感じられた。

上記のカーペットに見られる通り、現代では、公共施設における美術作品の重要性は周知の通りであるが、ここで、20世紀初頭に建てられたストックホルム市立図書館の美術作品についても触れておきたいと思う。ストックホルム市立図書館の一面には、子どもと若者のための図書室〔Barn Och Ungdom〕があり、その中の、子どものための読み聞かせ部屋には《Jon Blund》〔1927〕のフレスコ画が掲げられている。フレスコ画の作者 Nils Dardel〔1888-1943〕については、日本人研究者が論文をまとめており、それには、Dardel が世界旅行中の1917年に日本を訪れ、日本画に影響を受けたことが記されている⁵²⁾。なお Jon Blund は、北欧の民俗誌のおとぎ話のキャラクターとして登場する睡魔であり、英語では sandman と言い、大きな砂袋を背負った老人の姿の男として描かれるが、ストックホルム市立図書館に描かれているのは男の子である。建築家 Erik Gunnar Asplund〔1885-1940〕による壮麗な円形の書架で知られるストックホルム市立図書館は、その他にも Nils Sjögren〔1894-1952〕が制作した4本の腕を持つ戦士の蛇口のある水飲み場があることや、中央入口のドアの Adam と Eve をモチーフにした把手等の美術作品があったことでも知られるが、こうしたことは図書館の Web サイト⁵³⁾に紹介されていると共に図書館に用意されているパンフレットにおいて紹介されている。

図5に示すのは、ストックホルム市立図書館に置かれていた図書館の紹介パンフレット〔A5判4頁〕の一部である。パンフレットでは、子ども用のフロアには、子どもを念頭に置いてデザインされた美しい家具が置かれ、天井には Alf Munthe〔1892-1971〕が描いた星空が、また、読み聞

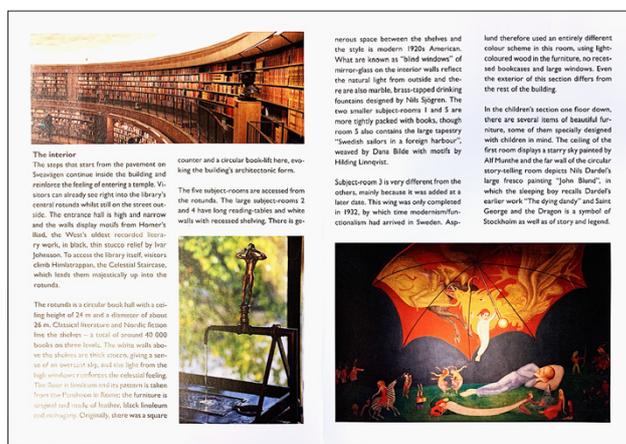


図5 スtockホルム市立図書館のパンフレット

かせをするための円形の部屋の奥の壁には《Jon Blund》のフレスコ画があることが記されている他、フレスコ画に描かれた眠っている少年は、Dardelがこの作品以前に制作した《The Dying Dandy》〔1918年〕を想起させることや、聖ジョージとドラゴン⁵⁴⁾は、ストックホルムの象徴であり且つ物語や伝説の象徴であることも記されていた⁵⁵⁾。

他方、Oodiの館内に置かれた図書館の紹介パンフレット〔A5判12頁〕には、各階で出来ることが書かれている他、最後の頁には、図書館を使用する心得の様なことが書かれていた。そこには、図書館が全ての人のためにあり、誰もが図書館に居る権利を持ち、理由がなくても図書館に出掛けることは認められ、人種差別等のあらゆる差別を認めず、他者を敬い、共有スペースとして皆で快適な環境に心掛けることと書かれ、更に、図書館のスタッフは来館者の安全を保障することを約束すると記されている。自由と平等と責任の教育を重視する北欧の市民性への意識の高さを感じさせる文章であると思った。図6には、Oodiのパンフレットの中から、図書館の2階及び3階の説明の箇所を挙げる。



図6 Oodiのパンフレット

Oodiの最終頁の文章を読んで思い出したのは、フィンランドメソッド〔Suomi Menetelmä〕について記された次の一節である⁵⁶⁾。

フィンランドの学校も、日本と同じように、班で行動することが多い。班で一つの作文を書くこともあり、ある生徒が描いた作文に対して、班全体で議論し、良いところ、悪いところを挙げて改善して仕上げる。それが終われば、隣の班に渡して添削してもらう。こうして、世の中には異なる意見があること、それを受け入れながら改善していくことの大切さを学び、批判的思考力を手に入れる。

最後に、コミュニケーション力。これも4～5人の班単位で行われる。まず、班長を決めるのだが、順番にまわってくるので、内気な子でも自然とリーダーシップが身につく。それから、「さえぎらない」「間違いと決めつけない」などの発言のルールを定め、議論が交わされる。こうして、ディスカッション、プレゼンテーションの仕方を学んでいくのだ。

この文章からは、フィンランドでは、他者と場を共有して生きるの意味が、学校教育で明確な意図を持って指導されていることが推察される。更にまた、これまで見て来たフィンランドのいずれの社会教育施設において、教育普及の活動単位にグループが出て来たのも、このことに関係すると考えられた。なお、この文章の前には、次の文章が記されている。

論理力を鍛えるのに有効な言葉が、「なぜ」を意味するフィンランド語の「ミクシ (Miksi)」だ。生徒が何か意見をいえば、「なぜ、そう思ったの?」、感想をいえば、「なぜ、そう感じたの?」という風に、「ミクシ?」が飛び交う。こうして、自分の発言を客観的に見直す習慣がつく。

アイデアを思いつき (発想力)、論理を構築しても (論理力)、それを的確に伝えられなければ意味がない。そこで、表現力を磨くために、10~20の指定された語句をすべて使い、できるだけ短い作文を書く。この練習を積み重ねることで、言葉を自在に扱えるようになる。

単に、他者と意見が違うことを受け入れるだけでは、他者に対する関心を無くすことに繋がる可能性がある。それを防ぐには、異なる他者の考えについて、意見が異なる理由を納得した上で受け入れることが肝要である。そのため教育では、他者の考えに対して異なる意見であっても思考を停止せず、客観的に冷静に受け止める姿勢を作ること为目标とするが、翻って考えると、子ども用ワークシートにおいても「ミクシ?」の観点と簡潔な文章にすることが意図されていた様に思われた。

3-5 No.8 : 北方民俗博物館

スウェーデン、ストックホルムにある北方民俗博物館⁵⁷⁾は、近隣の野外博物館のスカンセン〔表2 : No.9〕⁵⁸⁾と併せて巡ると、スウェーデンの博物誌への理解が深まる場所であった。北方民俗博物館には、野外のスカンセンでは展示が出来ない伝統工芸品や美術品が展示されている。編物の作品が多いこともあり、美術館の教育普及活動としては、工芸作品のワークショップの他、編物カフェが開催される。同様に、ノルウェー民俗博物館〔表2 : No.17〕は「オスロニットフェスティバル」〔Oslo Knitting Festival〕において、2019年9月7日〔土〕～8日〔日〕の両日、朝9時から午後5時頃まで編物ワークショップを開催する。このフェスティバルのプログラムを見ると、ワークショップの担当講師と内容が記され、その中には、日本古来の着物の端切れで作る「手毬」と説明されたワークショップもある。またそこには、手毬が友情と忠誠心を象徴する贈り物であるとも書かれていた。その他、プログラムの中には、自分が編んでいる作品を持参して、互いにコーヒーを飲んで語らうニットカフェの企画もあり、ワークショップが作品製作に留まらず、交流の機会を提供する場としても捉えられていることが理解出来た⁵⁹⁾。

これまで見て来たフィンランドの社会教育施設のWebサイトは、コンテンツの豊富さに圧倒される程であったが、それに比べると、北方民俗博物館のWebサイトの内容は乏しい印象を持った。



図7 子ども専用施設内部



図8 説明のパネルと服



図9 子どもの鑑賞用教具〔キャビネット〕



しかし実際に訪れた博物館は、次の図にも一部を示す通り、1階には過去のフィンランドの生活を再現した広い展示や、子ども若しくは子ども同伴の大人だけが入ることの出来る一画があり、その入口の傍にはバギーが複数台並べられる「駐車場」がある等、他の施設では見掛けることが少ない興味深い空間が複数見られた。

特に印象に残ったのは、子どもと子ども同伴の大人だけが入ることの出来る一画であったが、ここには、過去の農村の生活が実物大の模型で展示されており〔図7〕、ベッドやウォールフック、井戸や天秤棒等の近くにはイラスト入りのパネルが掛けられていて、そこには、服を着たり天秤棒で担いだりしては、と、子どもたちを誘う言葉が書かれていた〔図8〕。また、博物館内には、扉が閉じられた小型のキャビネットが複数箇所に置かれ〔図9〕、キャビネットの中に置かれた物や書かれた指示を手掛かりに、探偵に扮した子どもたちが、一定のストーリーに基づき歩を進めながら「犯人」を探し当てる仕掛けとなっていた。

更に、椅子に関する展示も珍しいものであった。そこでは、椅子の断面等を見せ、各部に使用されている材料の木や板、藁や布を展示していて、椅子の考案者やその椅子がいつの時代の製品か等が分かる解説もあった。展示された椅子は多数あり、日本でもその椅子のヴィンテージ品が販売されているElias Svenberg〔1913-1987〕のアームチェア〔KARMSTOL〕も見掛けた。なお、材料の展示には、マップケースの様なスチール製の家具が使われていて、来館者は各自、そこから引き出して材料を見ることが出来た。

3-6 No.9：スカンセン

フィンランドの教育⁶⁰⁾や福祉については「経済協力開発機構（OECD）」が2000年から3年に一度、15歳児を対象に読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーの3分野について実施している「生徒の学習到達度調査（PISA：Programme for International Student Assessment）」の結果において、特に2000年代に上位を占めたニュースで日本でも知られている。また、近年は、東京新聞が、フィンランドで1920年代に始まったネウボラ〔助言する場を意味するフィンランド語〕を中心にしたフィンランドの子育て支援制度を取り上げたり⁶¹⁾、千葉県浦安市等の自治体が、ネウボラと関係の深いベビーパッケージ〔マタニティパック／Äitiys pakkaus〕⁶²⁾の配布を行ったりしていることで耳にする機会がある。更に昨年はGALLERY A⁴が「生まれてはじめてもらうプレゼント“フィンランドのベビーパッケージ”」展〔2018年5月11日〔金〕～8月3日〔金〕〕⁶³⁾にお

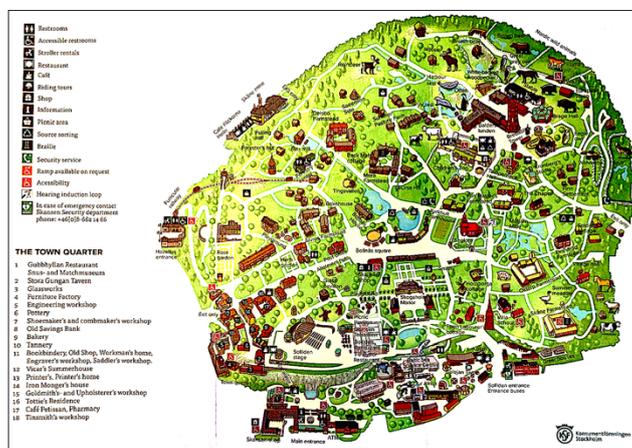


図10 スカンセンの地図

いて、ベビーパッケージの箱の使い道のアイデアを競うコンペを行ってもいる。

1891年に建立され、野外博物館として世界最古の歴史があるスウェーデンのスカンセン〔0.3 km²〕⁶⁴⁾は動物園及び水族館を併設することもあってか、子どもが多数来場していた⁶⁵⁾。但し、ノルウェー民俗博物館の前身は1881年に公開されており、建築技術に基づく歴史的建造物を移築して収集し展示する形式は、ここで始められ、スカンセンもこれを模したと言われる。なお、1900年頃にはノルウェーやスウェーデンに多数の野外博物館が設立されたが⁶⁶⁾、こうした野外博物館の建設には、工業化に伴い変質して行く自然や伝統的な農村の文化の保存を目指す「ナショナル・ロマンティシズムと呼ばれる芸術運動」⁶⁷⁾が関与していたとされる⁶⁸⁾。

前頁に掲げる図10は、スカンセンの入場口で配布されるパンフレットに掲載されたスカンセンの地図である⁶⁹⁾。

4. おわりに

本論では、フィンランドを中心に、現地での見聞とWebサイトの資料から、北欧の社会教育施設における教育普及活動の報告と内容の検討を行った。実際に現地で見たと、Webサイト等の資料から受ける印象には隔たりもあり、現地ではフィンランドもスウェーデンもノルウェーも、いずれも博物館や美術館では、アテネウム美術館に展示されていた美術館の設立の趣旨とする純粋美術と応用美術の融合は感じられず、純粋美術よりも工芸品やデザインを強調した展示が多く、美術館よりも博物館の展示の方が見応えがあり、人々の生活の保存と伝承に力点を置いている印象を持ったが、一方のWebサイトの教育普及に関する資料からは、鑑賞をあらゆる能力の発達の端緒と見做し、鑑賞を主とする美術による学習を手掛かりにして思考力や論理力を付けることを目指している様に感じた。

しかしこうした状況の背景には、日本が手工科の創設に際し、その教育方法及び内容を輸入したとされるスロイド〔slöjd〕の次に示す概念があるとも考えられる⁷⁰⁾。

サロモンは百年前すでに、「スロイド」と芸術 (konst) における近似的性格を強調する記述を残している。彼は、それら両概念が互いに近く位置していると考察することから、「スロイド」に「一般的手工業の仕事 (der vanliga hantverksarbetet)」から距離を持たせている。
〔中略〕

サロモンは、語源学的考察を行なった「教育学的問題のなかで (I pedagogiska frågor)」というその著書を、「教育学のスロイド」に注釈して終えている。そこでは、当時、教育の役割の中にスロイドを位置づけることが受け入れられた概念となったことを記し、そしてさらにサロモンは、ノルウェー語、ドイツ語、英語、ポーランド語、イタリア語、スペイン語においても「スロイド (slöjd)」が「教育学のスロイド (pedagogisk slöjd)」の意味でのみ扱われていることを語っている。

これらの文章が示唆する、スロイドを礎にした工芸と芸術と教育の密接な関わりを疑わない思想が北欧にはある様に感じた。

実際、フィンランドの芸術に関する教育に注ぐエネルギーは大きく、今年2019年2月11日に教育文化省が刊行し、WebサイトからPDFファイルが閲覧出来る「芸術と芸術家に関する政策に関

するワーキンググループ」からの提案〔Indicative Guidelines for Arts: Proposal by working group on the key objectives for arts and artist policy〕⁷¹⁾には、芸術家の社会的地位及び芸術促進のための支援に関する21の目標が掲げられ、芸術分野における教育の重要性や「芸術の教育」〔Education in the arts〕の重要性が記されている。例えば、芸術の自由・多様性・平等の精神に関する重要性を挙げた上で、芸術家の地位を保障するための芸術支援や芸術教育への資金投入のことや図書館における芸術分野への関わりの重要性、地域の文化施設での芸術に関するサービスによる福祉の向上、芸術家に対する生活費の補助による制作への専念の実現、芸術家の知的財産を守るための著作権に関する教育の重要性、芸術家として活動するために優れた能力を習得させる芸術教育の役割、芸術の推進のための芸術に対する理解や芸術の評価法に関する理解等を芸術教育で行う必要性、総合学校における芸術と文化に関する教育の重要性等が、目標と共に1項目ずつ詳しく記されていた。

周知の通り、現在の日本では、教員養成課程における美術教員養成講座は相継いで縮小され、講座としての体を成さない国立大学法人すら現れ、統合する大学も見られ始めた。上記の通り、ネウボラ等の福祉の面でフィンランドを模倣する自治体等の動きは見られても、デザインが福祉国家の実現に寄与したとする捉え方や上記の提案に触れた公報は見ることが無い。本論文を書き終えて、幼児教育や人の心に関する問題が多い現在の日本において、スロイドを参考にした明治時代とはまた異なる視点から、フィンランドを初めとする北欧の美術に関する教育を巡る施策及び思想を参照にすることには意義があると感じた。

付記

- ・括弧については、丸括弧は引用、亀甲括弧及び角括弧は筆者の挿入、二重山括弧は作品名、波括弧は同種の内容を複数並列する際に用いた。
- ・本文及び注に挙げた海外の施設のWebサイト及びパンフレットの文章の翻訳は筆者による。
- ・掲載したWebサイトへのアクセスは、全て2019年9月19日である。

注

- 1) 統計法に基づく基幹統計調査（基幹統計である社会教育統計を作成するための調査）として、社会教育行政に必要な社会教育に関する基本的事項を明らかにすることを目的に1960年から開始された調査であり「博物館調査」に関してはその対象を、(ア)博物館法第2条に規定する博物館、(イ)博物館法第29条に規定する博物館に相当する施設、(ウ)博物館と同種の事業を行い、博物館法第29条に規定する博物館に相当する施設と同等以上の規模の施設、としている。調査票は文部科学省のWebサイト<http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2018/09/20/1310937_002.pdf>に掲載されている。
- 2) こどもの城で実施された「モダンアートどんなもんだ?!」は「セゾン美術館(池袋)」で開催された「グッゲンハイム美術館展」の協力事業であるが、ここでは原寸大複製写真30点を展示すると共に五感を通して体験する仕掛けの展示が用意された。〔「モダンアートどんなもんだ?!」こどもの城, 1991, <http://kodomonono-shiro-weblibrary.jp/program/files/ld02_10.pdf>.〕
- 3) 現在、コペンハーゲン美術館のカフェで料理を提供するのは、雑誌『Casa』〔2019年2月19日号〕を介して日本でも紹介されたFrederik Bille Brahe〔1983年生〕であり、美術館内のカフェの室内インテリアを担当したのは、国際的に活躍するアーティストのDanh Võ〔1975年生〕であることが、コペンハーゲン国立美術館のWebサイト<<https://www.smk.dk/article/kafeteria/>>に記されている。
- 4) Children's birthday parties at SMK, SMK, <<https://www.smk.dk/en/article/childrens-birthday-parties-at-smk/>>.

- 5) 佐藤めぐみ「お誕生会の会場がゴッホ美術館!? 幼少時から芸術に触れさせるヨーロッパ流の子育て」『SHINGA FARM』2016/10/25更新, <<https://www.shinga-farm.com/study/european-art-education/>>.
- 6) Kumiko Nakayama「子どもがアートを満喫する誕生日。パーティができる、イタリアの美術館」『Fraise Craze』2016/04/08, <<https://medium.com/fraise-craze/子どもがアートを満喫する誕生日—パーティができる—イタリアの美術館-837638cb3d6d>>.
- 7) 博物館・美術館が展示作品の解説を提供するためにQRコードを活用していることは、2012年のポーランドの美術館の例<<http://smartphone-times.com/3685>>や、海外の観光客を見越して2017年頃から複数の言語で解説を提供している日本の国立博物館・美術館の例<<https://style.nikkei.com/article/DGXKZO21174310V10C17A9BE0P01/>>, 更には、今年2019年の福岡美術館の試みの例<<https://www.fukuoka-art-museum.jp/blog/6411/>>等で紹介されている.
- 8) 表2のNo.11に挙げたノルウェーのベルゲン市にある「KODE」ではFacebookで解説を読む様になっていた。Facebookは2017年に既にゴッホの5枚の『ひまわり』を動画で鑑賞し、解説を聞くヴァーチャルギャラリーを公開している<<https://www.facebook.com/VanGoghMuseum/videos/10159187334010597/>>. なお、2019年9月に訪れた桜島ビジターセンター内には「撮影してシェア!」と書かれた掲示があり、シェアする媒体に、LINE, Twitter, Facebook, Instagramが挙げられていた.
- 9) 「横浜美術館の教育普及」横浜美術館, <<https://yokohama.art.museum/education/index.html>>.
- 10) Oodi, <<https://www.oodihelsinki.fi/>>.
- 11) 3D スキャナーは、廊下の一画に置かれ、出力される様子が歩く人に見える様になっていた.
- 12) 「世界最高の図書館に選ばれたヘルシンキ市立中央図書館『Oodi』, ゲームや3Dプリントもできてあまりにもレベルが高すぎる」『GIGAZINE』2019/08/28, 20:00, <<https://gigazine.net/news/20190828-helsinki-central-library-oodi/>>. なお、フィンランドの図書館に限らずストックホルム市立図書館の館内にも、2019年10月5日の土曜日、午後1時から4時まで、仮面作りの工作のワークショップを開催することを記したパンフレットが置かれていた.
- 13) フィンランドは現在までの間、約650年間〔1155-1809〕はスウェーデン王国の配下にあり、ナポレオン戦争〔フィンランド戦争／ロシア・スウェーデン戦争〕後はスウェーデンとロシア間で締結されたフレデリクスハムの和約により約100年間〔1809-1917〕に亘ってロシア帝国に割譲された歴史を持つ。こうしたことから公用語はフィンランド語とスウェーデン語で、路線図等の市街の掲示物にも2ヶ国語が併記されている.
- 14) *SKISSI-KISSAN KIERROS*, Ateneumin Kansallisgalleria, <https://ateneum.fi/wp-content/uploads/2018/10/skissi_opeille_A4.pdf>.
- 15) Agneta Bervokk, “*Vem är du? Här är jag! Om porträtt och identitetmode och genus*”, Nationalmuseum, <<https://www.nationalmuseum.se/skola/studiematerial/vem-är-du-här-är-jag-om-porträtt-och-identitet>>.
- 16) Agneta Bervokk, “*Omöjliga kroppar Om skönhetsideal, mode och genus*”, Nationalmuseum, <<https://www.nationalmuseum.se/skola/studiematerial/omöjliga-kroppar-om-skönhetsideal-mode-och-genus>>.
- 17) ここでのコーヒーと紅茶の話から、スウェーデンの「北方民俗博物館」〔表2：No.8〕では、美術館の1階の展示作品がレストランの直ぐ近くにあったことや、収蔵品のある部屋の窓が開放されていたことが思い出された。収蔵品が生活用品であることも関係するとは思われるが、飲食を楽しみながら作品を見る習慣や、生きることと密接して作品がある生活が定着している印象を持った.
- 18) ベネッセハウス, ベネッセアートサイト直島, <<http://benesse-artsite.jp/stay/benessehouse/>>.
- 19) 世田谷美術館が行ったギャラリーツアーの一環とされるドラマライブ〔作品の前で作品に関するドラマを上演して鑑賞を行う〕は、アテネウム美術館におけるヨガのワークショップに関連する教育普及活動とも考えられる。〔参考資料：「一枚の絵から—アンリ・ルソーの作品から始まるドラマ」世田谷美術館, 2013/10/22, <https://www.setagayaartmuseum.or.jp/blog/2013/10/post_336.html>〕.
- 20) Pocket Guide to Mixing Color, The Color Wheel Company, <<http://colorwheelco.com/wp->

- content/uploads/2015/07/Pocket-Guide_sell-sheet.pdf>.
- 21) Taidetestaajat, Association of Finnish Children's Cultural Centers, <<https://www.lastenkulttuuri.fi/en/cultural-education-schools/art-testers-2016-2020/>>.
 - 22) Art Tester制度に基づくアテネウム美術館来訪者への質問と回答, <<https://www.taidetestaajat.fi/arviot/teokset/58db913ca424e6856bc28291>>.
 - 23) Art Tester プロジェクトの説明, <<https://www.taidetestaajat.fi/info>>.
 - 24) 展覧会名は, 工芸作品の極意の領域を紹介する趣旨から「奥義の世界」とも言えるだろうか.
 - 25) Secret Universe, Design Museum, <<https://www.designmuseum.fi/en/exhibitions/company-secret-universe-2/>>.
 - 26) 展覧会の謝辞には, フィンランドセンター〔Finnish Institute in Japan〕も含まれていた. フィンランドセンターのWebサイトを見ると東京国際ブックフェアに関する記事があり, そこにはルクコイラ(lukukoira)と呼ばれる読書セラピー犬の紹介があった. 読書犬はアメリカから伝わった試みであるとされた上で, フィンランドでは活動が始まった2011年から8年余りで50頭以上になったとある. ルクコイラについては「読むことが難しかったり, 何らかの理由で本を嫌うようになった子どもたちが, きちんと訓練された犬に読み聞かせることで, 読書の喜びと前向きな体験が得られるとされている. 大人相手では恥ずかしくて音読できない子どもも, 犬の前ではリラックスできます」と記されている. [Thank you all for visiting our booth at the Tokyo International Book Fair!, フィンランドセンター, <<https://finstitute.wordpress.com/>>.]
 - 27) 展示作品写真は<https://www.designmuseum.fi/wp-content/uploads/2019/04/IMG_1366.jpg>, ワークショップの紹介は<<https://www.designmuseum.fi/fi/events/secret-universe-nayttelyntapahtumat/>>で閲覧が可能.
 - 28) 展覧会を意識すると「理想郷の今: フィンランドデザインの歴史」ともなるかと思う.
 - 29) デザイン博物館におけるDesign Clubの説明は<https://www.designmuseum.fi/en/join-and-support/#design_club>に掲載されている.
 - 30) アアルト大学〔またはアールト大学〕は, ヘルシンキ工科大学・ヘルシンキ経済大学・ヘルシンキ美術大学が合併して2010年に開学した. 大学名は, フィンランドの建築家でデザイナーのアルヴァ・アアルト〔Alvar Aalto, 1898-1976〕に因む. なお, デザイン博物館は「1873年, ヘルシンキ芸術デザイン大学の前身であるヘルシンキ工芸学校に提供されたフィンランド工芸デザイン組合によるコレクションが元となって設立されたフィンランド・デザインを専門とする博物館」〔「デザイン博物館」メゾン・デ・ミュゼ・デュ・モンド, <https://artscape.jp/mmm/contents/c_00156.html>〕であることがDesign Clubの由来と考えられる.
 - 31) Free download of images: Art in the Public Domain, SMK, <<https://www.smk.dk/article/vaerker-til-fri-download/>>.
 - 32) 小学校3年生～6年生を対象とする無料の「Design Kiddie Academy」におけるクラブ活動も行われている. 2010年に始動し, デザイン博物館が開発した, 子どもや若者にデザインを教えるための方法や資料を用いて行う. 宝飾・服飾・工業デザイン等のデザインの分野についてプロのデザイナーが監督を行い, 参加者は各自の活動を通して, デザインのプロセスを経験する.
 - 33) 対象者は, デイケアセンター, 初等・中等・高等学校の子ども及び若者. 時間は90分で, 1回につき1人～22人. 料金は1グループ€60. 大人向けのワークショップもあり, 大人グループ〔1人～22人〕の場合は, 平日が€300, 土曜日及び日曜日は€350.
 - 34) キアズマの館内写真は, 次のWebサイトに掲載されている. [Linea_, <<http://www.linea.co.jp/info/detail/?iid=310&mo=>>>.]
 - 35) 図書室は次の<<http://blog.kiasma.fi/blog/kiasma-kirjasto-palvelee-taiteen-yystava/>>が参考になる.
 - 36) 展覧会の英文タイトルは「Coexistence : Human, Animal and Nature in Kiasma's Collections」である.

- 37) このCDの解説によると、作品の音源は植物から直接録音された「音の音〔音のオーラ〕の記録」であり、これは、対象物に高周波・高電圧を掛けて発生させた発光現象を撮影するキルリアン写真に相当するものであると言う。〔Lauri Ainala & Kalle Hamm – Immigrant Garden, <<https://www.discogs.com/ja/Lauri-Ainala-Kalle-Hamm-Immigrant-Garden/release/6468653>>〕.
- 38) 4枚の内の1枚は石黒浩氏の顔の写真であったが、これがアンドロイドか実物の写真かも不明。
- 39) Maija Tammi, Kiasma guide, <<https://guide.kiasma.fi/en/artworks/one-of-them-is-a-human/>>.
- 40) Hrafnhildur Arnardóttir, <<http://www.shoplifter.us/>>.
- 41) 参加費は1人€295, 大人は入館料も必要。ブルーベリー色とはどんな色か, 黄色の味ってどんな味, 乳児と一緒に遊ぶのに適した色は?等, 五感を活用したワークショップ。
- 42) キアズマのWebサイトからYouTubeにリンクされている。〔Kiasma Museum, YouTube, <<https://www.youtube.com/user/KiasmaMuseum?hl=fi>>。〕
- 43) *Kiasma Kids*, Kiasma, <<https://kiasma.fi/en/exhibitions/childrens-kiasma/experience-kiasma-with-children/>>. この画像の中央の子どもが持つ冊子はそのガイドブック *Kiasma Kids* である。
- 44) Helsinki Central Library Oodi chosen as the best new public library in the world, Oodi, <<https://www.oodihelsinki.fi/en/helsinki-central-library-oodi-chosen-as-the-best-new-public-library-in-the-world/>>.
- 45) 本賞には副賞として、スポンサーであるデンマークのソフトウェア会社Systematicから賞金5,000米ドルが贈られる。また、選出の際の評価の観点にはWebサイト<<https://systematic.com/library-learning/awards/public-library-of-the-year/>>に掲載されている通り、環境と地域文化の相互作用, 建物の機能性・柔軟性・持続可能性, 学習空間, 新技術〔デジタル〕化である。
- 46) 鐘麻樹「地域の国際交流 老人ホームや図書館にある『言語喫茶』とは ノルウェーから」2019/5/22, <<https://news.yahoo.co.jp/byline/abumiasaki/20190522-00126814/>>.
- 47) Vill du vara språkcaféledare?, Stockholms stadsbibliotek, <<https://biblioteket.stockholm.se/artikel/vill-du-vara-sprakcafeledare>>.
- 48) スtockホルム市立図書館のWebサイトでは、ストックホルム市内の図書館の全ての開館時間等の情報が見られる様になっている。そこでは、子どもが赤い起伏のある床一面の寝台に寝転がって本を読んでいる「TioTretton」の画像や、移動図書館の紹介の他、カロリンスカ大学病院内や老人ホーム内の図書館は患者やスタッフのみならず学生や親族, 近親者も本が借りられるといった情報や、日本でも有名な観光地セルゲル広場のガラスのタワーのある噴水の地下には「Lava」と言う名前の図書館があって、そこは14歳から25歳までを対象にした図書館であり、本以外にも楽器が借りられる情報等が挙げられている。また、この図書館のWebサイトには「Instagramでフォローして下さい」と記され、「Luma bibliotek」と言う元は電球工場だった図書館のWebサイトには「FacebookやInstagramでもご覧頂けます」と記されていた。実際、ベルゲンの美術館「KODE」では、作品のキャプションにQRコードが表示されていて、携帯端末をかざすとその作品と詳しい解説が現れ「KODEはFacebookを利用しています。Facebookに登録してKODEと繋がりましょう」と表示された。なお、各施設には概ね無料Wi-Fiが用意されており、エントランスに接続の説明が掲示されていたり、受付で接続の説明書を配布したりしている。更に、複数の図書館において、大学等高等教育機関の間でキャンパス無線LANの相互利用を実現するローミングサービスeduroamが用意されていた。
- 49) 館内地図, <https://www.oodihelsinki.fi/wp-content/uploads/2018/12/Oodi_Helsinki_floors_A4_print.pdf>.
- 50) カーベットのフルサイズの画像もWeb上では見ることが出来、更に、カーベットに関する詳しい解説は<<https://www.oodihelsinki.fi/mika-oodi/taide/>>にあるPDFファイルから読むことが出来る。
- 51) The 2019 winner, Systematic, <<https://systematic.com/library-learning/awards/public-library-of-the-year/vinder-2019/>>.
- 52) 梅谷綾「画家ニルス・ダンデル：バイオグラフィー紹介と作品タイトルの日本語訳提案」『北欧研究』22, 2017, p.167.

- 53) Stadsbiblioteket av Gunnar Asplund, Stockholms stadsbibliotek, <<https://biblioteket.stockholm.se/artikel/stadsbiblioteket-av-gunnar-asplund>>.
- 54) 聖ジョージ〔Saint George〕またはゲオルギオス〔Georgios〕は、古代ローマ時代の末期、カッパドキアで毒のある息を吐いて嘔み付き、子どもを生贄に差し出す様に要求して人間を脅かしていたドラゴンを退治し、その後、非業の最期を遂げたことから英雄とされた。他方、ドラゴンも、その血を浴びることで不死身になったり鳥の会話を理解出来る様になったりする神秘的な力があつたとされる〔金光二三郎監修『伝説の英雄とモンスター』西東社、2007, p.131〕。なお、スペインでは聖ジョージの日である4月23日に本を贈る伝統があり、スペインの提案を受けてUNESCOはその日を「世界図書・著作権デー」に制定し、日本でも「子どもの読書活動の推進に関する法律」の第10条に基づき、4月23日を「子ども読書の日」に制定している。因みに、2018年6月に修復で彫像が損なわれ〔その後、修復され〕たことで話題になったスペインのBorjaの町の聖ミカエル教会の木彫り聖ジョージの像である。〔Sam Jones, *Botched Spanish statue that went viral is lovingly unrestored*, The Guardian, 2019/06/21, <<https://www.theguardian.com/world/2019/jun/21/botched-spanish-statue-st-george-lovingly-unrestored>>.〕
- 55) ストックホルム市立図書館ハンフレット, *The Stockholm Public Library by Gunnar Asplund*, 2019年8月19日入手.
- 56) 日本フィンランド協会・萩原健太郎『フィンランドを知るためのキーワード A to Z』ネコ・パブリッシング, 2019, pp.126-127.
- 57) 北方民俗博物館, <<https://www.nordiskamuseet.se/en>>.
- 58) スカンセン, <<https://www.skansen.se/sv/>>.
- 59) 次の論文には、スカンセンを初めとする国内外の野外博物館について、1970年代の状況が報告されている。〔杉山尚次「文化財保存をめぐる二～三の問題」『桃山学院大学社会学論集』6(2), 1972, pp.117-119.〕
- 60) フィンランド教育文化省が発行する日本語のパフレット「フィンランドの教育概要」<https://www.oph.fi/sites/default/files/documents/151277_education_in_finland_japanese_2013.pdf>には、フィンランドの教育制度等の紹介がある。
- 61) フィンランドの子育てに関する東京新聞の記事には〔寺本康弘「【フィンランドの親子にやさしい子育て・上】妊娠からずっと見守る『ネウボラ』」6月29日朝刊, 「【フィンランドの親子にやさしい子育て・中】待機児童はいません。行政の義務です」6月30日朝刊, 「【フィンランドの親子にやさしい子育て・下】税金高くても納得！ 教育も医療も無料」7月1日朝刊〕等がある。
- 62) 140€相当の子ども用品が詰まった箱。フィンランド国立博物館で展示されている。
- 63) 展覧会パンフレットは<<http://www.a-quad.jp/exhibition/089/p01.html>>に掲載されている。なお、ベビーパッケージの箱の使い方のアイデアコンペには、埼玉大学の学部生・大学院生も多数出品し入賞した。コンペの概要及び作品の一例は「アイデアコンペ」<<http://www.a-quad.jp/exhibition/compe002/result.html>>で閲覧が可能である。
- 64) 日本の野外博物館には、明治村〔敷地面積：1km²〕や江戸東京たても園〔0.07km²〕等がある。
- 65) 「ヨーロッパでは、すでに19世紀末から各地の古民家を移築して展示する野外民家博物館が設立され、文化財への深い関心が示された〔中略〕これは歴史的記念物が比較的小さい関係から、まず民具などを収集した民俗博物館に力を入れ、これが母体となって民家を集めた規模の大きい野外博物館に発展したことが考えられる〔中略〕これらの中には純粋な民家博物館もあるが、遊園地を兼ねるものもあって利用者も多く、市民のいこいの場として重要な役割を果しているようである」とされる〔杉山尚次「ヨーロッパの野外民家博物館」『民族学研究』37(4), p.300.〕。実際、筆者らが訪れた日は、昼間に訪れていた子どもたちと入れ違いに、夕刻から始まるコンサートのためにスカンセンを訪れる高齢者の姿を多く見た。なお、今年2019年はスカンセンでの歌謡コンサートが40周年を迎える記念の年であったため、テレビでは1979年から2019年までの歌謡コンサートのハイライト映像が流れていた〔2019年8月20日〔火〕59分, <<https://www.svtplay.se/video/23336202/>>.〕

- 66) フィンランドにも、今年2019年に110周年を迎える野外博物館, Seurasaari<<https://www.kansallismuseo.fi/en/seurasaarenulkomuseo/frontpage>>がある.
- 67) 矢島國雄「野外博物館における民俗文化の保存と教育：スカンセンとプリマス・プランテーション」『MUSEOLOGIST・明治大学学芸員養成課程年報』6, 1991, p.24.
- 68) スカンセンを構想したArtur Hazelius〔1833-1901〕は「『建物やこれに付属するさまざまな物質文化と、そこに伺われる伝統技術や美意識を見せることと、保存すること』、『環境としての動植物を、農場などの生活と直結している部分や、より包括的な北欧の自然環境の両者を示し、人間の生活にとっての環境とそれとの関わりを示すこと』、『人とその属人的ともいえる技術や芸能を見せること、保存し、伝承すること』」〔前掲, 矢島, p.25.〕をスカンセンの構想にしたとされる.
- 69) スカンセンの地図は<<https://www.skansen.se/en/map-of-skansen>>に掲載されている. なお, スカンセンのWebサイトは所々「聴く」ことが出来る様になっている.
- 70) 遠藤敏明「スウェーデン・スロイド教育：語源学的考察をもとに」『美術教育学』9, 1987, p.38.
- 71) Indicative Guidelines for Arts: Proposal by working group on the key objectives for arts and artist policy, Ministry of Education and Culture, <<https://minedu.fi/en/Publication?pubid=URN:ISBN:978-952-263-619-5>>.

謝辞

- ・本研究の一部はJSPS 科研費 JP16K04743の助成を受けている.

(2019年9月29日提出)

(2019年10月10日受理)